

=====  
本メールマガジン[NEE Mail Magazine]は、経済教育ネットワークより会員の皆様にお  
送りしております。  
=====



◆ NEE Mail Magazine 97号 ◆

-----2017-2-3◆◇

如月。光の春の訪れです。

とはいえ、まだ寒さが続きます。2月に入試のシーズン。昨今はOA入試や推薦入試が多くなり一年中入試のようになりましたが、それでも、中学入試からはじまり高校（地区によっては3月ですが）、大学と一番寒い時期の入学試験です。大学入試では複数回の入試があたりまえになり大学の先生たちは、後期の採点と並行して一年で一番多忙な時期かもしれません。中高の先生たちは、送り出すことと受け取ることの両面で神経を使う時期です。それでも各地で梅の花のたよりが聞かれるこの時期、春遠からじです。

そんな季節、今月もネットワークの活動を報告するとともに、授業に役立つ情報を提供いたします。

---

【1】最新活動報告

1月の活動を報告します。

【2】イベントカレンダー

年次大会、部会の案内などを紹介します。

【3】授業のヒント

---

【1】最新活動報告

---

最新のニュース、昨年1月に行われた活動などを報告します。

■名古屋部会(No.9)を開催しました。

日時:2017年1月21日(土)15:00 ~ 17:15

場所:椋山女学園大学星が丘キャンパス

参加者:中学校・高等学校・大学の先生方など8名

主な内容:

(1)篠原総一代表(京都学園大学)より経済教育ネットワークの目的とこれまでの活動の紹介のあと、「教科書で教える金融」のレクチャーがありました。

高校の教科書では金融の4つのトピクスである、貨幣(money)、金融(finance)、日本銀行(central bank)、金融制度改革(reform of the financial system)が混在していること。金融全体をわかりやすく教えるためには、教科書に書かれている順番にとらわれず、関連を整理してわかりやすく教えるという観点から再構成した指導が必要という趣旨のお話がありました。特に、金融取引や制度は市場メカニズムに基

づき経済活動が効率的になるように行われていることを踏まえて、教える必要性が示された。その意味で、中学校や高等学校では「経済学」ではなく、身近な社会現象としての「経済」を教えるべきであることを強調されました。

(2)水野英雄先生(椋山女学園大学)より「女子大学における経済教育の取組と課題」をテーマに椋山女学園大学における経済学に関する授業実践とその課題について紹介がありました。

体験型教材の活用や産学連携の課題解決型の取組は学生に好評であり、学力の向上や学内外のコンクール等での受賞等という成果も挙げられている。一方、経済学は難しい、苦手であるという意見も多く、そのような学生に対して経済理論をどこまで、どのように教えるべきかについては検討課題であることが示され、質疑応答がされました。

内容の詳細は以下をご覧ください。

<http://www.econ-edu.net/meeting/nagoya/Nagoya010report.pdf>

#### ■冬の経済教室(札幌)を開催しました。

日時:2017年1月28日13時00分~17時00分

場所:北海道教育大学(札幌)サテライト教室

参加者 44名

(1)主催者挨拶のあと、「大学及び高校の入試問題をどのように授業に生かすか」のテーマで、西村理先生(同志社大学名誉教授)と川上敏和先生(同志社大学政策学部教授)の講演が行われました。

最初に西村先生から、これまで行ってきた入試問題分析の紹介があり、それを川上先生が受け継ぐ形で、需要・供給曲線、シフトについての経済学の立場からの解説が、高校入試問題の具体的事例をもとに行われました。時間の関係で、大学入試問題については問題紹介となりました。

篠原代表より補足として、昨年の夏の経済教室での山下豊先生(札幌市立簾舞中学校)からの「需要の増加」と「需要量の増加」の違いについて問題提起が紹介され、経済学習では、経済学的な違いを理解させることより、「経済の仕組み」をつかませることが重要であるとの説明がされました。

(2)「経済教育における『企業の社会的責任』の教え方」の講演が金井司氏(三井住友信託銀行経営企画部理事・CSR担当部長)から行われました。

まず、金井氏より、企業でCSRを推進している専門的立場から「企業の社会的責任」の内容について講演が行われた。教科書では企業の目的は「利潤を得ること」であり、CSRは利潤追求の贖罪としての社会貢献といった記載になっている。しかし、企業の目的は「企業経営の目的は社会奉仕にあり、利潤はその結果である」としたヘンリー・フォードの言説のほうが企業人としてはフィット感があること、米国、欧州、日本のCSRに独自の発展の経緯がある中で、日本は江戸時代からの企業倫理と欧州の社会共生型CSRの融合したものとの説明があった。また、日本において進展している資本市場改革と企業統治改革の最新動向が紹介され、CSRを投資家が後押しするESG(環境・社会・ガバナンス)投資が注目を集めていることや、外部不経

済が生む社会的費用の内部化を企業に求める声が強まる中で、世界が抱える問題を解決するための 17 の目標を掲げた SDGs(持続可能な開発目標)が今後非常に重要になると説明された。

次に山崎辰也先生(北見北斗高)より、CSR を高校公民科で教える方法について現場からの問題提起とコメントがありました。

従来、メセナやフィランソピーなどを暗記させるものになりがちであること。しかし、今後は、「希少性」や「トレードオフ」などの経済概念を活用して「見方や考え方」を働かせることが求められ、例えば「企業の役割は利潤を上げることなのに、なぜフィランソピーやメセナを行っているのだろうか?」という問いに対し、経済概念を使って考えさせるような授業が求められていることが、生徒の反応の紹介とともにコメントされました。

(3)引き続き、「経済学習を通じて主権者を育てる:新聞を使った実践事例」の講演が、河原和之先生(立命館大学他)から行なわれました。

河原先生は、まず、北海道教材の事例として、「ニセコに関する記事を用いた多文化共生のアプローチ」、「釧路の人口減少や石炭・パルプ産業に対するアプローチ」の方法を紹介、本論では、「鳥取県大江の郷のたまごかけご飯から地域再生を考える」、「トイレから考えるインドの経済格差」、「お掃除ロボから AI と社会の変化を考える」、「都市鉱山、紛争鉱物から考えるエシカルな地理教育」、「災害国日本から減災国へ」などのテーマについての新聞を使ったアプローチの方法が紹介されました。

河原先生の実践は、生徒の全員参加を目指し、「問い→解答・解説」の連続によって生徒の参加を促すという特徴と、難しい概念を噛み砕いて教えるという、二つの特徴を持ったもので、授業内容のユニークさだけでなく、授業づくりの発想から学ぶべき点が多いものでした。

(4)その後、質疑応答が行われ、盛況のうちに札幌の冬の教室は終了しました。

内容の詳細は以下をご覧ください。

---

## 【 2 】イベントカレンダー

---

\* イベント予定です。

■ 年次大会(シンポジウム)を開催します。(既報)

日時: 2017年3月25日(土) 13:00~17:00

場所: 京都学園大学 太秦キャンパス

参加方法は以下をご覧ください。

<http://www.econ-edu.net/announcement/Sympo/20170325RSymposium.pdf>

\* 定例部会のお知らせです。(開催順)

■東京部会 (No.89)を開催します。

日時:2017年2月9日(木) 19時00分~21時00分

場所:日本大学経済学部会議室

参加方法は以下をご覧ください。

<http://www.econ-edu.net/meeting/tokyo/tokyo089flyer.pdf>

■大阪部会 (No.52)を開催します。

日時:2017年2月18日(土) 18時00分~20時00分

場所:同志社大学 大阪サテライト(予定)

参加方法は以下をご覧ください。

<http://www.econ-edu.net/meeting/osaka/Osaka52flyer.pdf>

■名古屋部会 (No.11)を開催します

日時:2017年4月22日(土) 15時00分~17時00分

場所:椋山女学園大学 現代マネジメント学部棟

参加方法は以下をご覧ください。

<http://www.econ-edu.net/meeting/nagoya/Nagoya011flyer.pdf>

---

### 【 3 】授業のヒント

---

■トランプを使った授業

アメリカでトランプ大統領が就任。TPP 離脱、NAFTA の再検討など、内向き、重商主義的保護貿易の政策など問題の政策が矢継ぎ早に出されています。トランプゲームでいえば、いままでの政策の逆ディールが起きようとしています。

ただし、今回のヒントはそういった通商政策ではなく、本物のトランプを利用した金融の授業のヒントです。

仕掛けは単純です。トランプをグループ分だけ用意して、ババ抜き、7ならべなど単純なゲームをさせるだけです。

ババ抜きの場合はルールを変更して、普通のババ抜きは、ジョーカー(ババ)を残したものが負けとするのに対して、このゲームではジョーカーを残したものを勝ちとします。

7ならべはそのままやります。

ここから何を読み取らせるか。二つあります。一つは、ババ抜きの場合、自分の持っているカードと相手を持っているカードの二枚の同じ数字が出てこない札を落とせません。物々交換での欲望の二重をイメージすることができます。ただし、トランプゲームでは交渉したり自分のカードを見せたりして自発的相手と交換して一致をさせるわけではないので完全な二重性とは言えませんが、自分と相手の利害が一致することがゲームでは大事ということが実感できるでしょう。

もう一つが、二つのゲームから、ジョーカーが何を意味しているかを考えさせることで

す。答えはマネー。変形ババ抜きでは最後にジョーカーを持ったものが勝者ですから、最後に残るジョーカーは、経済取引の最後に残る資産と推定できるでしょう。7ならば、ジョーカーは万能ですから、マネーの万能性が推定できることを期待したいところです。

生徒が大富豪やポーカーを知っていたら、ジョーカーがワイルドカードとして万能であることも紹介して、そこからマネーを推定させてもいいかもしれません。

トランプを使ったこの授業、ここからお金の役割を論じるにはちょっと牽強付会すぎるかもしれません。ジョークですよといったら、私がジョーカーになってしまいますが、自習時間や余裕のある時に実施して、こんなゲームからも経済に通じるヒントがある、と気づかせるきっかけになるとよいと思います。読者の皆さんが、トランプゲームでこんな部分が使えよとかここを修正すると面白い教材になるよという提案があればお寄せください。紹介してゆきたいと思います。

それにしても、本物のトランプ大統領、ジョーカーカードに書かれているような道化役で済むのか、悪魔役となるのか、それとも万能の切り札となるのか、注目したいところです。(新井)

---

#### 【 4 】編集後記(みみずのたはこと)

1930年代を思い出させるような経済認識を持つ人物が世界のリーダーになってしまう現実。これまでのアメリカの経済教育の成果やいかにと嘆くだけで済むわけではないことも事実です。日本でも、「云々」を「でんでん」と読み国会答弁をするリーダーがいます。こちらは、経済リテラシーだけでなく、言語能力を高めることが大事ということなのかもしれません。でも、こんな話をすると、天に唾をするようで少々怖い話です。(新井)

---

登録に心当たりのない方、今後配信を希望されない方は下記会員ページよりお手続き下さい。

<http://www.econ-edu.net/aboutus/contact.html>



編集・発行 : 経済教育ネットワーク

(C) Network for Economic Education ◆◇